

イタリア・ファシズムにおけるナショナルな経験の生成

——「農村ファシズム」におけるネイション——

秦泉寺 友紀

イタリアはファシズム誕生の地であり、20年余り存続したイタリア・ファシスト体制は、ファシズムを名乗った世界初の体制であった。19世紀半ばの統一以降のイタリア社会は、地域社会とネイションへの帰属意識とが両立せず対立関係にあることが特徴であった。だが、ファシズム期にはナショナルなアイデンティティが存立するにいたる。本稿は、「農村ファシズム」と称される系譜から、それを可能にした転換の分析を試みる。

1 はじめに

ネイションが歴史的に構築されたものであるとの指摘は、近年論を待たない⁽¹⁾。しかし、そのような指摘、あるいは暴露を経てもなお、ネイションという「新しい意識のかたち」(Anderson [1983→1991=1997:14])は崩れていないのであり、そのようないわば虚構のものとしてのネイションが、自明のものとして信憑性を獲得するメカニズムこそが、問われるべき問いとなっている。その問いに対峙するとき、イタリア社会は、ナショナルなアイデンティティの普及をめぐる紆余曲折ゆえに、注目すべき存在といえる。

19世紀半ばの統一以降のイタリア社会では、中央集権的な地方制度にもかかわらず、地域社会——殊に日本の市町村にあたるコムーネ⁽²⁾——は、ネイション以上に重要な存在として経験されてきた。それを示唆する事例として、30

年間の軍隊生活を経て、1907年に退役した軍人の証言がある。

(連隊に加入する)若者100人のうち99人は、祖国が何であるかを知りませんでした。生まれ育ったコムーネはよく知っていました。しかし、偉大な、一つの、強い祖国であるイタリアを、若干名が口にすることができただけで、どのようにできあがったか、世界で我々が何をするのかは知りませんでした。(藤澤 [1997:314])

このような地域社会の存在が、ネイションが重要なものとして理解されることを阻害し、ナショナルなアイデンティティの普及の遅滞に反映したとのイタリア社会をめぐる見解は、一般的なものである。しかし、先の軍人が退役した15年後には、ネイションと、それを「法的に体現したもの」としての国家を至上とするファシスト体制が発足し、ときに広範な「参加」を得

つつ、20年以上に渡って存続した。つまりファシズム期には、ネイションが重要な存在として経験されるにいたったわけである。このような大きな変化は、マス・メディアの発達 (Cannistraro [1975]) や学校教育 (Koon [1985]) 等を通じたものとして、さまざまに分析が試みられてきた。しかしそれらの分析では、ナショナルなアイデンティティの普及に苦戦してきたイタリア社会で、ファシズム期にはなぜ、ネイションという新たな様式が浸透し得たのかが十分に論じられてきたとは言いがたい。

ファシズム期の社会にみられるのは、後でみるように、単にネイションのみというのではなく、地域社会とネイションを両立させるような社会的経験である。つまり、そのネイションは、既存の地域社会を消滅させるものではなく、それと両立可能なものとして経験された。換言すると、ナショナルな経験は、地域社会をめぐるそれとの連関のなかで可能になったということである。本稿はそのような状況を、ファシスト体制が称揚したネイションが、地域社会、殊に農村に象徴されるそれに帰結したという点から明らかにすることをめざす。20世紀初頭のイタリアは、農業国から農業＝工業国への急速な転化を遂げつつあったが ([Procacci [1970= 1984: 216]), 1920年の段階でも、就業人口の半数は農業に従事する農業国だったDe Grazia ([1981= 1989:163])。

イタリア・ファシズム研究では、ファシズムは「運動」と「体制」の局面に分けられてきた。それは単に運動期と体制期という時間的な区分ではなく、「運動としてのファシズム」は、ムッソリーニを「ドゥーチェ (首領)」とする「体制としてのファシズム」のなかで「だんだん重要性を失い、二義的なものとなるが、つねに存在した」(De Felice [1975=1979:48-49])、ファ

シズムの大衆運動としての性格である。なかでも、イタリア中・北部の農村地帯を中心に展開した「農村/地方ファシズム」(fascismo rurale/provinciale 以下では、一般的な訳語の「農村ファシズム」を用いる)と総称される系譜は、ファシズムの「運動」の局面を最も色濃く反映する。

「農村ファシズム」は、1920年秋から1921年春にかけて、「懲罰遠征」(spedizione punitiva) と称された、主に社会主義勢力へのテロ行為——施設の破壊や放火、メンバーに対する殴打や地域社会からの「追放」など——を主たる活動とした系譜である。それは、地域社会を個別に制圧することで、ファシズム運動の大衆運動への転換をもたらした (高橋 [1997:140])、中央におけるムッソリーニ内閣の成立を導いた。この系譜の活動は、ムッソリーニのイニシアチブによるものではなかったが、そこで立てられたネイションは、ファシスト体制におけるネイションに継承された。本稿は、「農村ファシズム」を対象として、そこにみられる地域社会とネイションをめぐる社会的経験の転換の痕跡をみていくことにしたい。

本稿の構成は、2で、ファシズム研究の系譜をたどる。3では、ファシズム期までの地域社会とネイションをめぐる経験の相克と、ファシズム期におけるその転換を踏まえ、問題の所在を明確にする。4では、続く分析の準備として「農村ファシズム」のあらましを確認する。5では、地域社会をこえてネイションと対峙した初期の「農村ファシズム」における、地域社会とイタリアの関係性をめぐる新たな経験——個別の地域社会を調停するものとしての国家——の展開を追う。6では、そこから分節化した新たなネイション像——地域社会に象徴されるものとしてのネイション——をたどる。

2 ファシズム研究の系譜

ファシズムは、理解不能な「醜態状態」、非合理的な逸脱現象として捨象されたこともあったが⁽³⁾、戦後繰り返し考察の対象とされ、膨大な研究が蓄積されてきた。かつてファシズム研究には、一方に、階級に着目し、その「反動」、「反革命」としての性格を指摘するマルクス主義の立場⁽⁴⁾、他方に、支配の様式に着目し、ファシズムを「テロル」を基盤とする「全体主義」とみなす立場があり⁽⁵⁾、イデオロギーを背景とする対立構図をなしていた。

だが1960年代半ば以降は、実証的な研究の蓄積に伴い、当事者の視点に即してファシズムを再構成することが目指されている。1970年代中頃からは、当事者のなかでも、エリート層や反ファシズムの闘士といった特殊な少数の人々に限定せず、いわゆる「民衆」を視野におさめる分析が試みられるようになった（例えば Tannenbaum [1972]、Koon [1985]、Passerini [1987] など）。そのような研究では、ファシズム下の社会は、さまざまな制約⁽⁶⁾が存在した一方で、必ずしも「抑圧」と「忍従」に満ちてはいなかったことが明らかにされた。それは、「日々の生活」をめぐる、以下のような回想に端的に示される。

ファシスト・イタリアとか帝国の命運、「ドゥーチェ」に対する「信頼」についての大げさな話にもかかわらず、わたしが日々の生活でみたのは、静かな暮らしを望むつつまじやかな人々が繰り広げた、お粗末な見世物でした。その人たちは、そうすることで自分の地位を守ったり、何かの利益が得られたりするるのであれば、何のためらいもなくファシストのブ

ーツや制服を身につけました。(Albertoni and Antonini eds. [1962:29])

近年では、当時の「民衆」の積極的な「参加」も既知となりつつあるが、体制への目立った抵抗がみられず、人々が社会の安定を享受しているかにみえる社会像を、「合意」現象として分析したのが、1970年代から80年代にかけての「合意論」と総称される研究だった⁽⁷⁾。合意論は、「合意」現象の存立と崩壊の両面からファシズムを捉える方向性を持ち、マス・メディア (Cannistraro [1975]) や勤労者の余暇事業団 (De Grazia [1981=1989]) などの諸事例を通じて、「合意」現象が立ち上げられていく過程を論じた。そして、それを支えた要素として、ファシスト体制がもたらした失業率の低下など、「経済生活面」と「社会平和面」にわたる「安寧」と、「革新の夢、革新の要求や衝動、動機を表現したもの、何かを新しく建設しようとする『革命主義』」(De Felice [1975=1979:82-83]) の二点を指摘した。後者の「革命主義」は、前者のような与えられた恩恵とは別の、ファシズムそのものがもった「魅力」ともいべきものであった。

合意論の「安寧」の論点は、ファシズムを「ひたすら秩序を求める復興運動」(Bobbio [1990=1993:214]) と捉えた資本家層の支援などに関して、一定程度有効である。だが、「革命主義」の論点は、合意論が元来めざしていた、ファシズム期のあからさまにファシズムでない、先の回想記の記述から示唆される「日々の生活」の解明から逸れるものであり、その後、正面から取り上げられることはなかった。さらに重要なこととして、合意論は「合意」現象という終着点を据え、ファシスト体制が新たに「合意」を獲得する過程を焦点としており、それ以前の社会がいかなる変容を経て「合意」現

象へ向かう始発点にいたったのかは問うていない。「日常生活」に埋め込まれた認識は、ファシズム以前とファシズム期との連関に留意して分析されるべきものである。

3 地域社会とネイション

ひとくちに「日常生活」に埋め込まれた認識といっても膨大である。本稿は、冒頭であげた問いにあたって、なかでも地域社会とネイションをめぐる社会認識を対象とする。イタリア社会におけるネイションをめぐる認識の展開をみていく際、20世紀初頭の「反ジョリッティリズム」と総称される思想は、その転換の嚆矢であると同時に、ファシズム勃興の重要な土壌のひとつにも位置づけられてきた（例えばLyttelton [1973]、Gentile [1982]など）。この思想は、ネイションとしてのイタリアを自らの希望を集約するものと想定していた点で、ナショナリズムの系譜に位置づけられる。これは、イタリア・ナショナリスト協会（Associazione Nazionalista Italiana）⁽⁸⁾を有力な磁場とした思想で、当初は都市部の若手知識人の間にしか広がりをもたなかったが、第一次世界大戦を契機として、大衆的な広がりを獲得した。

20世紀初頭のイタリア政界の中心的人物ジョリッティ⁽⁹⁾にちなんだ同時代の政治の総称が、「ジョリッティリズム」である。それは、国内のすべての政治勢力、利益集団を議会政治の枠内に包摂し、国民的統合を一応達成させた（馬場 [1979:7-8]）。しかしそれはあるべきイタリアではないというのが、「反ジョリッティリズム」の基本的な批判だった。イタリア統一以来、カトリック勢力やミラノの分離独立主義者などさまざまな立場から、イタリア批判はなされてきた⁽¹⁰⁾。ただし従来の批判は、その境界も含め、

イタリアというネイションの正統性をも批判するものであり、イタリアというネイションの存在を前提とする、あるべきイタリアといった理想が掲げられる状況ではなかった。それに対し、「反ジョリッティリズム」は、イタリアという「〈新たな祖国〉、〈真の人民大衆〉、創出されるべき〈国家〉などといったかたちで夢想され切望された、新たな、しかしまだかたちをとらない実体」（Gentile [1982:56]）への信頼を前提とした。ここで現状と切り離されて、イタリアというネイションをめぐる理想が想定されるにいたるのである。

第一次世界大戦をめぐる一連の出来事を経て、イタリアというネイションそれ自体は、自らが払った犠牲に報いるもの、変革の希望を集約するものとして理解され始めた。かろうじて戦勝国となったイタリアだが、この戦争での死者は約68万人、経済的コストは1570億リラに上り（井口 [1998:121]）、世論が注目していたフィウーメの領有問題⁽¹¹⁾も認められず、勝利は傷つけられたものと批判された。戦後社会の不況のなかで、農民を中心とする帰還兵士による社会的承認を求める運動が興隆し⁽¹²⁾、殊に1919年からの2年間には、徴兵を受けず、戦地に赴かなかった工場労働者を中心とする労働争議が頻発するなど⁽¹³⁾、社会的不満は高まっていた。だが、それらの不満は、イタリアというネイションにではなく、異なる社会層や政府に向けられたのだった。

ファシズム期の社会では、何らかのかたちでネイションが重要な存在として経験されるにいたったわけだが、このような「反ジョリッティリズム」の基盤は、ファシズムが得た大衆的な広がりを部分的には説明するものである。ただしイタリア社会では、地域社会のなかでも特にコムーネが「固有の自立的世界」馬場

([1979:45])として経験され⁽¹⁴⁾、統一から35年後の1896年の段階で、「国家がなすべきこと」を語る際、「地域主義」は「むかつくような悩みの種」として語られていた(藤澤 [1997:165-166])。それは、「生まれた場所に対する愛着」⁽¹⁵⁾としてのカンパニリズム (campanilismo) に反映していた。

ファシズム期もその初期においては、コムーネは「反ファシズム派の最後の防壁」(井口 [1998:144])として、その存在は問題視されていた。以下は、ファシスト独裁が宣言された1925年、パレルモの県知事が送ったとされる電信である。

この地におけるファシズムは、それぞれのコムーネに存在する個別のグループから成り立っているにすぎない。各支部は、各コムーネ行政の優先順位にならって、もしくは、マフィアやそのほかの人的なしがらみ、過去の状況とのしがらみにならって、そのコムーネに独自の対応をとっている。(Lupo [1993=1997:262])

ファシズム期の社会でも、依然として地域社会が重要な存在と捉えられていたとするなら、新たなナショナルな経験の広がりや、それとの連関のなかで分析されねばならない。そして地域社会もまた、ネイションとの連関抜きには論じられない。国際連盟による対イタリア経済制裁⁽¹⁶⁾に抗して行われた貴金属の献納運動、「祖国に金を」(oro per Patria, raccolta dell'oro 1935年10月~12月)が、非常な盛り上がりを見せたなど、ファシズム期には何らかのかたちでネイションが志向された痕跡があるからである。そうであるとするなら、むしろ問われるべきは、地域社会が溶解してネイションに収斂されたのではな

く、地域社会を何らかのかたちで残したままのネイションが志向されるという、新たな在り方と思われる。

本稿は、それを解く鍵のひとつは、ファシスト体制が称揚するにいたったネイションが、地域社会と独立な存在ではなく、むしろ地域社会、殊に農村に象徴されるそれになったことにあると考える。以下では、そこにいたるまでの変遷を「農村ファシズム」と総称される系譜を通してみたい。

4 「農村ファシズム」の系譜

「農村ファシズム」は、イタリア中・北部の農業地帯を中心に、主に社会主義勢力を標的としたテロ行為——「懲罰遠征」と称された——によって、地域社会を個別に制圧した系譜である。その地域社会は、農村に限定されず、都市—農村関係を含むものだった(北原 [1981:108])。「懲罰遠征」は、議会政治への不信に根ざした直接行動で、それを担った集団はスクアドラ(squadra)、構成員はスクアドリスタ(squadrista)と呼ばれ、そのなかから、諸地域に年齢的には30代から40代を大半とする地域ボスのラス(ras)が登場した。その構成に関するまとまった資料は残存していないが、職業は商人、学生、鉄道従業員、手工業者、自由業、土地所有農などさまざま、血縁や身近な人間関係の紐帯が、少なからず重要な位置を占めている(北原 [1981:107])。

「農村ファシズム」の支援者としては、社会主義勢力に脅かされていた、農業資本家層があげられる。その資金面の支援は、「農村ファシズム」が勃興する決定的要素ともされてきた(Elazar [1996:232])⁽¹⁷⁾。中・北部の農業地帯は、「農村ファシズム」の興隆以前は、イタリア社

会党 (Partito Socialista Italiana. 以下、社会党) 最大の支持基盤で⁽¹⁸⁾、なかでも中部を拠点とする社会党系の日雇農業労働者の組合のフェデルテッラ (Federterra) は、当時の農業労働力の市場で、「赤い男爵」と呼ばれるほどに強大だった (岩本 [1978:36])。加えて、ファシストの「あらゆる耕作者に土地を」というスローガンをめぐり、「合理的計算」を働かせていた農業従事者も、「農村ファシズム」の支援者として無視できない (Brustein [1991:658-662])。

「農村ファシズム」の地域社会とネイションをめぐる社会認識は、ファシスト体制に継承され、当時のイタリア社会におけるナショナルなアイデンティティのある程度の広がり の基盤となった。ただし「農村ファシズム」は、「戦闘ファッシ」 (fasci di combattimento)⁽¹⁹⁾ から「全国ファシスタ党」 (Partito Nazionale Fascista 以下、ファシスタ党) への改編 (1921年)、ファシスタ党による一党独裁の宣言 (1925年1月)⁽²⁰⁾ 等を経て、ファシズム勢力内でのパワーゲームでは、最終的には敗北にいたった系譜である。だが、「農村ファシズム」勢力は、ムッソリーニを中心とする「戦闘ファッシ」が、1921年3月から10月にかけて、会員を約8万人から21万人へとほぼ倍増させた際の (Germino [1959:52])、その主翼を担った。「農村ファシズム」は、もともと「戦闘ファッシ」のイニシアチブのもとで展開していたわけではなく、それに加入後も、諸地域のファッシは、一概に「戦闘ファッシ」本部の方針に従属するものではなかった。

5 調停者としての国家

「農村ファシズム」勢力は、「懲罰遠征」を主とする活動様式の点ではおおむね共通していたが、地域社会ごとの特徴も色濃い運動だった。

例えば、ポローニャ地方のファッシは、富裕な地主出身の弁護士のアラスが農業資本家層と結びついて影響力を拡大しており (Cardoza [1982:329-339])、プレーシャ地方のそれは、当初は学生を中心とする影響力に乏しいサークルだったが、下層中産階級出身で、地域社会内での社会的上昇志向の強い野心的人物の加入により、「懲罰遠征」を主体とするものへと変貌した (Kelikian [1986:125-133])。また、カラーラ地方のそれは、特産の大理石の採石場主によってつくられ、転向した採石労働者が構成員の多くを占めていた (Lyttelton [1973:71])。

このような、中・北部の農村地帯の地域社会を拠点としたファッシの総称が「農村ファシズム」であり、個々のそれは、各々の拠点とする地域社会の状況に応じて活動していた。「ファッショ」 (複数形は「ファッシ」) は、もともと特定の政治目標を達成するために、多様な人々が同胞意識に結ばれて行動する運動の様式を指す言葉だった。「農村ファシズム」勢力を構成する諸ファッシには、協力して達成すべき共通の目標はなく、基本的に各々の拠点とする地域社会内で完結していた。「懲罰遠征」における「懲罰」のひとつの「追放」に端的に示されるが、「農村ファシズム」では、社会主義勢力に代表される敵を、地域社会から排除することが重要だった。このような「農村ファシズム」の経験は、イタリア社会における地域社会をめぐる常識的なとらえ方——歴史的事情と風土的諸条件のために、自分の住む地方は、それ自体ひとつの完結した世界として経験されてきた (竹内 [1998:61]) ——に沿って、かたちづくられたものといえる。

「農村ファシズム」勢力が、単一の組織として、特定のイニシアチブのもと活動していたわけではないにもかかわらず、共通して、社会主

義勢力を「懲罰遠征」の標的とした点もまた、少なくとも部分的にはこうした「農村ファシズム」の経験のなかで理解することができる。中・北部の農業地帯を基盤としていたイタリアにおける社会党は、地域主義的な性格を有しており、第一次世界大戦を経てもその性格は無傷のまま残っていた (Kelikian [1986:68])。そのような性格ゆえに、社会主義勢力は、「農村ファシズム」と地域社会の覇権を争う「身近にいる具体的な敵」(岩本 [1978:34]) として理解され、攻撃対象とされたのである。

「農村ファシズム」で、各々の地域社会の制圧がめざされていたことは、以下のようなことから示唆される。例えば、カトリック勢力の強固だったブレシャ地方では、社会主義勢力のみならず、カトリック勢力までもが「懲罰遠征」の標的とされた (Kelikian [1986:125-133])。また、フェラーラ地方の「農村ファシズム」勢力は、社会党系の組合のフェデルテッラ——地域社会内での経済的覇権のみを事実上めざしていた——を壊滅させると共に、フェデルテッラの機能をそのまま引き継ぐ「自治組合 (sindacato autonomo)」を設立した (岩本 [1978:43-44])。このことは、「農村ファシズム」がフェデルテッラの担っていた役割については否定していなかったことを示す。

「農村ファシズム」勢力の拡大が、ムッソリーニを中心とする「戦闘ファッシ」の本部と対立したこともまた、同様の経験によって説明される。「戦闘ファッシ」本部は、農村地帯でのファシズムの拡大を歓迎してはいたが、「懲罰遠征」にみられるような、テロリスト的な「農村ファシズム」の姿勢については否定的だった (Lyttelton [1973:62-63])。加えてそれは、「農村ファシズム」勢力が、地域社会のエリート層と結びついて、地域社会を制圧することに対しても

批判的だった。農業資本家層の支援を受け、資金面でも「戦闘ファッシ」から独立していたボローニャ地方のラス、アルピナーティに対し、「戦闘ファッシ」本部は、以下のような不快感を示す文書を送っている。

貴殿のファッショは、混乱したやり方で機能しており、近頃の多くの転向者のファシストは、自分がその地域の司祭であるかのように振舞っている。よいファシストになるためには戦闘ファッシに加盟するだけでは不十分であり、我々の綱領の精神を理解する必要がある。ボローニャのファシストは、その地域の後退した分子に完全に仕えており、ファッショに政治的ダメージを与えている。(Cardoza [1982:304])

このような不快感は、エリート層との接近に対してというよりも、「戦闘ファッシ」本部のイニシアチブを離れることに向けられたものといえる。ここでの「地域の後退した分子」は、農業資本家層などのエリート層をさすが、「戦闘ファッシ」本部もまた、工業家などの資本家層の支援を受けていたのであり、既存のエリート層との接近は即、「綱領の精神」の理解不足と結びつくものではないからである。

「戦闘ファッシ」の本部と「農村ファシズム」勢力の対立は、1921年8月、政府の仲立ちで、ムッソリーニが社会党との「平和協定」を締結したことにより、頂点に達した。「農村ファシズム」勢力は、この協定を、行動の自由を制約するものとして激しく反発した。例えばフェラーラ地方のラス、バルボは協定を「ファシズムを抑圧し、破壊するもの」と批判し (高橋 [1997:141])、ボローニャ地方のラス、グランディと共に、3000人規模で「ラヴェンナ行進」と

称した協定破り、示威行動を行った (Lyttelton [1973:78])。この協定は、社会党と対等の立場で協定を結ぶことで、中央政界での影響力強化を企図したものだったが、「農村ファシズム」勢力の反対により、ムッソリーニはわずか3ヶ月で、協定を「過去のもの」として撤回した。

だが、「平和協定」をめぐる一連の出来事によって、「農村ファシズム」は「イタリア全体」と対峙し、それとの連関のなかで、地域社会を位置づける必要に迫られるにいたった。この協定の撤回直後、「農村ファシズム」勢力は、ムッソリーニを絶対的な党首とするファシスタ党への改編に協力した。それは「平和協定」に反対するなかで、ローマでの市民の反ファシスト行動と政府の介入に接したことを契機として、自らの勢力の基盤である、イタリア最大の農業地帯のポー平野が、イタリア全体と同義でないことを認識したという、経験上の変化 (高橋 [1997:142]) によって説明される。

この時期、「農村ファシズム」は、国家権力を獲得することなしにはファシズムが存続しえないこと、そのためには「懲罰遠征」だけでは不十分であり、政治的活動が必要であることを認識した (高橋 [1997:142])。「農村ファシズム」で求められたのは、ラスが自らの地域社会での行動の自由、自由裁量を確保することだったが (Cardoza [1982:335])、そのためには、「国家権力」の獲得が必要なことが認識されるにいたった。そのような転換のなかで、議会での政治経験を欠くラスではなく、社会党での議会政治経験⁽²¹⁾をもつムッソリーニがリーダーと認知されるにいたるのである。プレーシャ地方のラス、トゥラーティは「平和協定」が問題になった際、配下の成員がそろってそれに反対し、脱退者も出るなかで、そのような批判を「社会主義者の策略」と退け、本部の方針に反抗しなかった。

このことにより、トゥラーティは党本部からその地方の秩序回復を全権委任された (Kelikian [1986:141])。トゥラーティの例は、先のような認識の転換の嚆矢ともいえよう。

ただし、「ローマ進軍」に代表される直接行動の要素も残っていた。ムッソリーニのイニシアチブのもと、1922年10月、4名の有力なラスの名で蜂起が宣言され、「ローマ進軍」が開始された⁽²²⁾。このような軍事的圧力により、ムッソリーニは「進軍」開始の2日後の10月30日、国王から連立政権の首相に任命された。ファシスタ党の機構の整備も進められ、「農村ファシズム」に関しては、翌1923年1月、「懲罰遠征」を担った集団のスクアドラが、ラスと切り離され、首相の直接管轄下に創設された国防義勇軍 (Milizia Volontaria per la Sicurezza Nazionale) に改組された (柴田 [1982:207-217])。また同年10月には、「農村ファシズム」勢力が中心だった党指導部のローマ居住が義務づけられ、ラスは拠点とする地域社会を離れた。これら一連の、「農村ファシズム」勢力を抑制する施策は「正常化」と称された。

1923年から1925年にかけて、以上のような状況を背景として、ファシスタ党内部は、ファシズムの進むべき方向をめぐる紛糾した。それは、さらなる「革命」の続行を求める「農村ファシズム」勢力が中心の「非妥協派」と、それに反対する「修正派」との対立構図を描いた。「修正派」は「都市ファシズム」と総称される系譜が中心で、ファシズムを「知識人の革命」とし、テクノクラートの指導階級の養成を主張していた⁽²³⁾。ムッソリーニは「修正派」を支持していた。

この相克を経て、「農村ファシズム」における国家、ネイションをめぐる理解は確立した。それは、国家をめぐるものと、ネイションをめ

ぐるものとの2つの局面をもった。本節では前者を、次節では後者を取り上げる。前者の国家に関わるそれは、「非妥協派」を擁護した論者マラバルテ⁽²⁴⁾の主張に端的に示される。それは、ファシズムに欠けている「調停者」としての、正確で統一的な「国家観念」が必要であるというものだった⁽²⁵⁾。ここでは、イタリア社会で一般的なものだった、国家とネイションについての、外在する、時に敵対的な存在という意味づけは転換している。その国家は、地域社会の自律性を前提とし、それを擁護するものとして想定されていた。

既存の中央集権的な自由主義体制のもとでは、コムネをはじめ、地域社会の自律性は阻まれてきた。「農村ファシズム」は、それに対し、政府から派遣された県知事や「戦闘ファッシ」本部のイニシアチブさえ離れ、地域社会を拠点として、自らの自律性——それがいかなるものであれ——を回復したものと捉えられていた。「農村ファシズム」では、地域社会の自律性の維持が肝要なことであり、それが「革命」の基底となる要素だった。ただし、そこには同時にもうひとつ、先にあげたうち後者の、ネイションをめぐる転換もあったのであり、それこそがファシスト体制に継承された。以下ではそこに議論を進めたい。

6 地域社会に象徴されるネイション

ファシスタ党における地域社会とネイションの関係性は、党の綱領（1921年11月制定）に示される。ネイションや地方分権をめぐる規定に重点をおいたこの綱領は、「農村ファシズム」に対立した「都市ファシズム」の系譜を反映し、「農村ファシズム」が重視する地域社会の自律性を脅かすものだった。その綱領は、基本路線

として、ナショナルな社会を卓越した存在と位置づけ、ネイションを、「個々人の単なる総和でも、政治的な諸党派が自らの目的のために使う手段でもなく、人種の有形、無形の全ての価値を統合したもの」とした。また、短期的な目標として、「公的行政を脱中心化すること」を掲げたが、それは「政治的な地方主義に陥らずに」達成されるべきこととされ、「地方主義」は、「我々が断固として反対する」ものとされた⁽²⁶⁾。

ただし、「農村ファシズム」の衰退は、いわば身内の「変節」によるものとなった。「非妥協派」と「修正派」の相克が続く1925年2月、クレモナ地方のラス、ファリナッチがファシスタ党の党書記——党内でムッソリーニに次ぐ地位——に就任した。ファリナッチは、「地方の革命精神の表現」⁽²⁷⁾として「農村ファシズム」勢力の期待を集めていた人物で、彼自身も、地元クレモナの大会で、自らの就任を党内部での「非妥協派」の勝利と説明していた（高橋 [1997:149]）。だが、就任後のファリナッチは、「カリスマ的に正統化された指導部をもつ革命的エリートの党」を志向するようになり、中央の方針に従わない地方のファッシの改編を進め、その県書記やナショナリスト協会に加入した履歴をもつ党员など、1年間で約2000人の各級党幹部と、5～6万人の一般党员を除名した（高橋 [1997:144]）。後任の党書記長に就いたプレーシャ地方のラス、トゥラーティも、その路線での党改革を推進した（1926年3月～1930年10月）。

ファリナッチの党書記長在任中、ファシストによる一党独裁宣言から約1年後の1926年2月に新たに導入された地方制度は、1923年に行われたスクアドラの国防義勇軍への改編と並び、「農村ファシズム」勢力を抑制するものだった。コムネをめぐる地方制度は、公選の市長に代

えて、政府の任命するポデスタを市長職とするものに改定され、人口5000人未満のコムーネは、ポデスタに統治されることが定められた（井口 [1998:144]）。このような地方制度は、公選で議会と市長が選出されていた、従来の自由主義期の制度以上に、中央集権的なものだった。「コムーネにおける政府権力の唯一の代表者はポデスタであって、それ以外は誰もいない」との通達も出され（Aquarone [1965:341]）、ラスなど地域社会でのファシズム勢力の有力者は、ポデスタの下位におかれた。

このような元ラスの「変節」は、先の「農村ファシズム」における地域社会と国家をめぐる経験——地域社会の自律性の維持を前提とし、国家を調停者として理解するというもの——からは逸脱したものである。そのような「変節」ともみえる態度は、彼ら個人の問題としては、ファシスト体制内での出世を動機づけにしたこととしても解釈される。だが、先の転換と同じ時期に、「農村ファシズム」では、ネイションをめぐる、もうひとつの経験の転換が生じていた。この転換によって、元ラスの「変節」は、少なくとも部分的には説明され得るのである。

1921年夏から秋にかけての社会党との「平和協定」をめぐる一連の出来事、さらには「修正派」との相克が、ここでも鍵となる。その過程で「イタリア全体」と対峙した「農村ファシズム」の拠点である地域社会は、それまでの個別性を脱し、ひとつの総体として捉えられるにいたった。元来、地域社会ごとの個別のグループだった「農村ファシズム」勢力は、次第にファシズムにおけるひとつの派として経験されるようになった。それは、「平和協定」に反対する最大の示威行動「ラヴェンナ行進」が共同で行われたことや、クレモナ地方のラス、ファリナッチが、単にクレモナという一地域社会の代表

ではなく、「地方の革命精神の表現」と期待されていたことにもあらわれる。

そのような新たな経験は、再びマラパルテの主張に端的に示される。マラパルテは、1924年、ファシズムには2種類あるとし、「農村ファシズム」が中心の「非妥協派」のそれは、「歴史、民俗、芸術、経済の構成体である諸地方を代表し、イタリア人の民衆的な郷土の感情、寛大で偏見のない感情を表現している」ものとした⁽²⁸⁾。1926年にも、マラパルテは、芸術は政治に通底すると断ったうえで、ファシスト芸術は「私たちのもっともイタリア的な伝統」に根ざし、「農村的、地方的な」、「本当の意味で民衆的な芸術」であるとした⁽²⁹⁾。注目すべきは、重要な位置が与えられてはいる「農村」や「地方」が、個別性を脱し、総体としての「農村」や「地方」が「イタリア」の象徴に位置づけられていることである。そして、「諸地方を代表」する「非妥協派」のファシズムは「イタリア人」の「民衆的な郷土の感情」を「表現」するものとされた。

このような地域社会とネイションをめぐる意味づけは、地域社会の自律性の擁護を最重要な前提に据えていた、先の転換とにわかに結びつくものではない。地方のファッシの改編や県書記の更迭は、これに抗した経験が依然として存在したことの証左とみることもでき、ネイションをめぐる転換は、「農村ファシズム」全体を覆ったものとはいえない。だが、その広がりとは別に、ネイションと地域社会をめぐる経験を両立可能なものとする地平を開いた、この転換それ自体の重要性は看過できない。つまり、ネイションは「地方」や「農村」に象徴されるものとしてならば、経験可能なものとなるのである。そしてそれこそが、ファシスト体制におけるネイションの基盤となった。

ファシスト体制は、「労働憲章 (Carta del lavoro)」(1927年4月)⁽³⁰⁾のなかで、ネーションについて、「これを構成する個別または集団の諸個人より、効力においても恒久性においても優越した目的・生活・行動手段を有する有機体」、「道徳的、政治的、経済的統一体」とした⁽³¹⁾。この憲章は、ファシスト体制の政綱的宣言に位置づけられるもので、その規定はファシスト体制公式のものだった。それと同様のネーションの意味づけは、遡れば1921年11月のファシスタ党の綱領にもみられるものであり、ファシスト体制におけるネーションは、「都市ファシズム」のそれをそのまま反映したものとみえる。

ただしファシスト体制は、「労働憲章」と同時期、1927年頃から、「農村ファシズム」の基盤であった農村を、「腐敗した」都市と対比して、賛美し始めるなど、「都市ファシズム」のものではない。農村の賛美は、それをイタリアというネーションの象徴と位置づけて行われたのであり、地域社会とネーションの関係性は、農村に象徴されるネーションというそれにいたった。ムッソリーニは「アメリカ化された人々」の服装から「イタリア初期の農民」の地味な服装に替え、イデオログは「高貴な農民」のテーマを扱い、それを称賛した (De Grazia [1981=1989:169])。たくましく堅実な家長である農夫とその妻は、イタリア民衆の美德のシンボルとされた (De Grazia [1981=1989:346-347])。ファシスト体制による、1927年以降の農村への介入政策は、「農村化運動」と称され、生産性向上のための近代化に加え、「農村的なものの擁護」が推進された。それは農村の社会関係における「永遠のもの」、「伝統的なもの」、「調和のとれたもの」のさらなる強化をめざすものだった (De Grazia [1981=1989:172-173])。「農村ファシ

ズム」における、地域社会に象徴されるネーションという意味づけは、こうしてファシスト体制に継承されたのである。

7 さいごに

本稿の問いは、ファシズム期における「日常生活」に埋め込まれた、地域社会とネーションを両立させるような社会的経験は、いかにして可能になったのかというものだった。そのような社会的経験こそ、イタリア社会におけるナショナルなアイデンティティの存立を可能にしたものであった。ファシスト体制では、イタリアというネーションは、「これを構成する個別または集団の諸個人に優越する有機体」とされた一方、それは地域社会、殊に農村に象徴されるものともされた。後者に重点をおいたものとしてならば、地域社会とネーションを両立させるような社会的経験は可能なのである。

このようなナショナルな経験の存立を示唆する事例として、先に3であげた「祖国に金を」運動があるが、その地平は、ファシスト体制がまったく新しく編み出したものではなく、「農村ファシズム」によって開かれたものといえる。この運動では、庶民的な人柄で人気を集めていたエレナ王妃によるムッソリーニ宛の手紙の新聞掲載⁽³²⁾を契機に、殊に結婚指輪の献納が「自己犠牲」、「忠誠の証」として推奨された。12月18日に設定された「忠誠の日」には全国各地で式典が開かれ、1日で185,229個に及ぶ結婚指輪が献納され (Il corriere della sera紙 1935. 12. 20)、「花嫁花婿は金の結婚指輪を献納し、そのことを後悔しなかった」(Vene [1990=1993:316])。国民全体が各々の結婚指輪を「祖国」に献納するということは、「祖国」がひとつの家になるという統合のメタファーともいえよう。この運

動では、献納品の重量が、「最も高尚な競争」として、近郊の諸コミュニティーと競われるものと位置づけられもしていたが (Il corriere della sera紙 1935. 12. 20)、その地域社会は既にネイションと両立可能なものとして経験されたのだった。

「農村ファシズム」は、ファシズムにおける大衆運動の局面を担った系譜であり、ファシズムではあったにせよ、当時のイタリア社会の「日常生活」の一端を垣間見せるものといえる。それは当初、各々の拠点とする地域社会に完結していたが、ファシズム勢力の中央政界での影響力拡大に伴って、その地域社会の自律性を、国家との関連で維持する必要に迫られた。そこで「農村ファシズム」は、地域社会の自律性を前提とし、国家を調停者として位置づけるにいたった。ただし同時に、ネイションは、個別性を脱した総体としての地域社会、殊に農村に象徴されるものとされ、それがファシスト体制におけるネイションの意味づけに継承されたのである。

このような転換は、「農村ファシズム」勢力の個々の構成員に及んだものだったとは限らないが、そのことは別問題として、本稿はその転換それ自体の意義に注目した。ただし、このような転換の具体的な局面については、さらに詳しくみていくべきであろう。ファシスト体制に大きく寄与した「都市ファシズム」についても、本稿はきわめて部分的にしか扱わなかったが、ファシズムの全体像をつかむには、併せて考察する必要がある。また、当時の、ネイションをめぐる「日常生活」に埋め込まれた社会的経験を検討するには、大衆運動の局面を担ったとはいえ、ファシズムそのものである「農村ファシズム」から明らかにされることには、おのずと限界がある。「合意」現象さえ、「大部分のイタリア人が否定的な対応に終始した」(De Grazia

[1981=1989:22]) ものであったとするならば、ファシズムの外の社会的経験をみていくことは不可欠といえよう。

註

- (1) ネイションに先行する何らかの共同体をその土台として重視する立場と、ネイションの存立を工業化によるものとする立場がある。ただし、前者もネイションがダイナミックに蘇るのは近代であるとしている。ネイション、ナショナリズムに関する既存研究の理論的対立をめぐっては吉野 ([1997]) 第2章「エスニシティとナショナリズムの社会理論」を参照のこと。
- (2) 中世の封建都市国家に起源をもつともいわれるが、制度的な継続性をもつものではない。人口や面積にかかわらず、同一の法的主体であり、人口が100人に満たない小規模なものから、ローマなど大規模なものまでが同一の規準で規定されている (工藤 [1999:107])
- (3) その代表的論者として、クローチェが挙げられる。クローチェは、ファシズムを病気あるいは偶発事故と規定し、それを治癒するための努力は必要だが、その歴史的社会的原因を探る必要はないとした (Croce [1931→1954:297])。
- (4) 同時代のディミトロフ・テーゼに典型的だが、(Kitchen [1976]) など。
- (5) 全体主義論のアプローチとして、Arendt ([1951=1974→1981]) など。ただしイタリア・ファシズムは、「全体主義」的な性格を持たない「一党支配国家」とされた (Arendt [1951=1974→1981:7])。
- (6) 新聞も含め、出版に際しては県知事の認可が必要になり (1924年)、既存の労働組合がファシスト組合へ改編されるとともに、ストが禁止された (1926年)。また、ファシスタ党とその傘下の団体以外の結社は禁止され、国王や王妃、政府主席の

- 生命、身体、自由を侵した場合は死刑とする「国防措置に関する」法が制定された（いずれも1926年）。
- (7) 中心的な論者であるデ・フェリーチェは、1929年から1934年の時期には、「最大の合意の雰囲気」があったとし、1936年までを「合意の時代」と名づけた（De Felice [1974:54-55]）。1929年は、イタリア統一以来の懸案だった教皇庁との和解が成立した年で、この年のファシズム大評議会の名簿は98.4%の支持を得た（井口 [1998:153]）。また1936年には、エチオピア併合によりイタリア帝国の建国が宣言された。
- (8) 1910年結成。協会結成以前のイタリアにおけるナショナリズム運動は、雑誌を中心とする文化運動が主体だったが、徐々に政治運動化した。移民問題を重視し、イタリアをプロレタリアートとする主張を掲げたことで、一部のサンディカリストの賛同も得た。協会の有力メンバーであるフェデルツォーニ(1878-1967)やロッコ(1875-1935)は、ファシスト体制で内相や法相などの要職に登用された。殊にロッコは労働憲章の起草に当たるなど、ファシストの国家体制建設への寄与が大きかったとされる。
- (9) Giolitti, Giovanni (1828-1928) 1903年から1914年の第一次世界大戦勃発直前まで、イタリア政界の中心人物として、社会党改良派やカトリック穏健派との歩み寄り、普通選挙の導入などによって、自由主義国家の大衆の基盤の拡大に努めた。
- (10) 19世紀末、ダーリオ・パーバを中心に「ミラノ国家」構想が喧伝された（藤澤 [1997:302-303]）。また、カトリック勢力は、イタリア王国は「現実のイタリア(Italia reale)」と異なる「法定のイタリア(Italia legale)」であるとし、コムーネ選挙への参加は許したものの、国会議員選挙への参加は認めなかった（村上 [1988:36]）。
- (11) パリでの講和会議は、ロンドン秘密条約で認められていたダルマツィアの領有と、その条約にはなかったが、多数のイタリア人が居住しており、世論でその領有が期待されていたユーゴスラヴィアのフィウーメの領有の双方を認めなかった（森田・重岡 [1977:207-208]）。
- (12) 陸軍だけでも300万人を数える帰還兵士は、イタリアの勝利についての兵士の貢献にたいする国民的承認と、とくに傷痍軍人への援助措置の実施を求めて、帰還兵士協会（Associazione dei Combattimenti）や傷痍軍人協会(Associazione dei Mutilati)を結成し、一大勢力となった（伊藤 [1984, 1985]）。
- (13) この2年間は「赤い2年間」と呼ばれ、トリノの金属労組を中心に50万人規模の工場労働者で行われたものを頂点とする工場占拠、中・北部の農業労働者による土地占拠が頻発した（森田 [1976: 454-455]）。
- (14) イタリアの地域社会には、コムーネ(comune)の他に、コムニタ(communita)、クアルティエーレ(quartiere)、県であるプロヴィンチア(provincia)、レジオーネ(regione)等の諸概念がある（古城 [1987:149-150]）。レジオーネは、イタリア王国の行政単位ではなく、統一後、中央集権的なイタリアを批判する勢力によって、地方分権、あるいは連邦制の拠点として、改めて用いられるようになった。
- (15) Zanichelli社の辞書Il nuovo zingarelli ([1987])による。
- (16) 戦力に欠けるエチオピアへの侵攻は、国際社会の批判を集め、エチオピアの提訴を受けた国際連盟は、1935年10月から翌1936年6月まで経済制裁を行った。ただしそれは、対イタリア輸出禁止品目から、自動車、石油、鋼鉄等が外され、アメリカ、ドイツ、イギリスがこれに加わらなかったなど、さほど厳しいものではなかった（石田 [1994:71]）。
- (17) ファシズムの「農業資本家 (agrari) の利害の直

接的、武力的防衛の必要性の体現者」としての性格は、同時代から指摘されている。第一次世界大戦以前、中・北部の農業資本家は、ジョリッティを中心とする「自由派」の堅固な選挙基盤となることで地域社会の指導層としての立場を確保していたが、戦後、選挙での主導権を社会党勢力に奪われ、危機的状況にあった (Elazar [1996:235-250])。

(18) 1920年10月末から11月初旬の地方選挙では、社会党は、中・北部を中心に、イタリアの全コムーネの約4分の1、全県の3分の1以上で第一党となった (馬場 [1979:41-42])。

(19) 「戦闘ファッシ」は1919年3月、ムッソリーニの呼びかけで、元社会主義者や革命的サンディカリスト、未来主義者、帰還兵士など100名余の参加を得て発足し、ミラノに本部を置いていた。1919年6月に出された「戦闘ファッシ」の綱領は、選挙権を得る年齢の引き下げ、上院の廃止、8時間労働の実現、ナショナルな意識の育成をめざす教育改革など雑多な目標を掲げたもので、「戦闘ファッシ」は、「農村ファシズム」も含め、多様なファッシの連合体だった。

(20) 1924年6月、社会党議員マッテオッティが、総選挙でのファシスト勢力の選挙干渉を批判する演説を行った翌日に誘拐・殺害され、ムッソリーニ周辺のファシストの関与が疑われたものの、犯人の検挙には至らなかった。これに抗議した野党議員と一部の与党議員が議会出席をボイコットし、メディアも反ファシズムの論陣を張るなど、ファシズム勢力は苦境に立たされた。だが、国王が首相の罷免権を行使しなかったこともあり、ムッソリーニはこれを切り抜け、逆に「ファシスト独裁」を宣言した。

(21) ムッソリーニは1912年の社会党大会で、党内右派を弾劾し、彼らを党から追放する立役者となり、党内で脚光を浴びた。これを契機として党中央機関紙 *Avanti!* の編集長に抜擢されたムッソリーニ

だが、2年後、第一次世界大戦に際して参戦論に転じ、社会党を除名された (森田・重岡 [1977:198-200])。

(22) エミリオ・デ=ボノ、チェーザレ・マリア・デ=ヴェッキ、イタロ・バルボ、ミケーレ・ビアンキの4名。「ローマ進軍」は、国内の力関係に沿った政権、すなわち、ファシスト主導の連合政権を実現するための最後の一突きとされる (馬場 [1979:57])。

(23) 中心的な担い手は都市部の知識人層で、保守的合法主義に代わる新たな合法性の枠内での活動を訴えた。その活動は雑誌などメディアを通してのもので、ファシズムの教義や理念を重視していた。

(24) Malaparte, Curzio (1898-1957) ドイツ人を父とし、本名は Kurt Erich Suckert。第一次世界大戦への参戦運動を経て、1921年にファシスタ党に入党。1931年、『クーデタの技術』を発禁処分にされ、1933年には逮捕、短期間流刑に処された。戦後も文学、ジャーナリスト活動を続けた。

(25) 1924年7月の *Conquista dello Stato* 記事 (高橋 [1997:148]) より再引用。

(26) Aquarone ([1965:327-328]) より再引用。

(27) 1924年7月の *Conquista dello Stato* 記事。(北原 [1981:114]) より再引用。

(28) 1924年7月の *Conquista dello Stato* 記事。(北原 [1981:114]) より再引用。

(29) 1926年11月の *Critica fascista* 記事。De Rosa and Malgeri ([1980:344]) より再引用。

(30) ファシズム指導者は、30項目から成るこの憲章を「ファシズム革命の基本文書」と称し、自由主義と社会主義を克服する第三の道、協同体秩序の基本原理の宣言と称揚して、大規模に宣伝した (竹村 [1979:235])。

(31) Aquarone ([1965:477]) より再引用。

(32) *Il corriere della sera* 紙、1935年12月5日の紙面の第一面に掲載された手紙は以下である。

「あなたはイタリア女性が私たちの愛すべき偉

大な祖国の栄光のために捧げた多くの結婚指輪のなかで、祖国への喜びの念とともに与える私の結婚指輪とあわせて、王の結婚指輪が、愛と忠誠のシンボルになりますでしょうことをご存知のことと思います。私の結婚指輪は非常に大切なものかわりです。なぜなら、私にイタリ

ア人であることの幸せを得た日のことを思い出させるからです。」

Il corriere della sera紙はミラノを拠点とする全国紙で、当時の発行部数は40万部。エレナ王妃はモンテネグロ出身だった。

文献

- Albertoni, Ettore A. and Antonini Ezio eds., 1962, *La generazione degli anni difficili*, Laterza.
- Anderson, Benedict, 1983→1991 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso Editions, and NLB. = 1997, 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.
- Aquarone, Alberto, 1965, *L'organizzazione dello Stato totalitario*, Torino.
- Arendt, Hannah, 1951 *The Origins of Totalitarianism*, Brace & World. = 1974→1981, 大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起源 3 全体主義』みすず書房
- 馬場康雄 1979, 「イタリア議会政治の危機とファシズム—第五次ジョリティ内閣を中心に」東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会 第7巻 運動と抵抗 (中)』, 東京大学出版会
- Bobbio, Norberto, 1990, *Profilo ideologico del Novecento*, Garzanti. = 1993, 馬場康雄・押場靖志訳『イタリア・イデオロギー』未来社
- Brustein, William, 1991, "The Red Menace and the Rise of Italian Fascism," *American Sociological Review*, 56.
- Cannistraro, Philip, 1975, *La fabbrica del consenso: Fascismo e mass media*, Laterza.
- Cardoza, Anthony L, 1982, *Agrarian Elites and Italian Fascism: The Province of Bologna, 1901-1926*, Princeton University Press.
- Croce, Benedetto, 1931→1954, *Etica e politica*, Laterza.
- De Felice, Renzo, 1974, *Mussolini il Duce: Gli anni del consenso 1929-1936*, Einaudi.
- , 1975, *Intervista sul fascismo*, Einaudi, = 1979, 西川知一・村上信一郎訳『ファシズムを語る』ミネルヴァ書房
- De Grazia, Vittoria, 1981, *The Culture of Consent: Mass organization of leisure in fascist Italy*, Cambridge University Press. = 1989, 豊下楯彦・高橋進・後房雄・森川貞夫訳『柔らかいファシズム』有斐閣
- De Rosa, Gabriele and Malgeri, Francesco eds, 1980, *Critica fascista 1923-1943*, Luciano Landi Editore.
- Elazar, Dahlia Sabina, 1996, "Agrarian relations and class hegemony: a comparative analysis of landlord, social and political power—Italy 1861-1920." *British Journal of Sociology*, 47(2).
- 藤沢房俊 1997『大理石の祖国』筑摩書房
- 古城利明 1987「南北問題から都市自治へ」北川隆吉・蓮見音彦・山口博一編『現代世界の地域社会——重層する実相への社会学的視座』有信堂

- Gentile, Emilio, 1982, *Il mito dello stato nuovo*, Laterza.
- Germino, 1959, *The Italian Fascist Party in Power*, University of Minnesota Press.
- 井口文男 1998 『イタリア憲法史』 有信堂
- 石田憲 1994 『地中海新ローマ帝国への道——ファシスト・イタリアの対外政策 1935 - 39』 東京大学出版会
- 伊藤公雄 1984—85 「生成期イタリア・ファシズムにおける帰還兵運動の位置」 『神戸大論叢』 35(3), 36(2)
- 岩本純 1978 「農村ファシズムの社会的基盤」 『イタリア学会誌』 28
- Kelikian, Alice.A, 1986, *Town and Country under Fascism: The Transformation of Brescia 1915-1926*, Oxford University Press.
- 工藤裕子 1999 「地方自治制度」 馬場康雄・岡沢憲美編 『イタリアの政治』 早稲田大学出版会
- 北原敦 1981 「地方ファシズムの思想」 『思想』 689
- Kitchen, Martin, 1976, *Fascism*, Macmillan.
- Koon, Tracy, 1985, *Believe, Obey, Fight: Political Socialization of Youth in Fascist Italy, 1922-1943*, University of North California Press.
- Lupo, Salvatore, 1993, *Storia della mafia*, Donzelli. = 1997, 北村暁夫訳 『マフィアの歴史』 白水社
- Lytelton, Adrian, 1973, *Seizure of Power: Fascism in Italy, 1919-1929*, Princeton University Press.
- 森田鉄郎 1976 『イタリア史』 山川出版社
- 森田鉄郎・重岡保郎 1977 『イタリア現代史』 山川出版社
- 村上信一郎 1988 『権威と服従——カトリック政党とファシズム』 名古屋大学出版会
- Passerini, Luisa, 1987, *Fascism in Popular Memory: The cultural experience of the Turin working class*, Cambridge University Press.
- Procacci, Giuliano, 1970, *Histoire des italiens*, Arthème Fayard, = 1984 豊下楯彦訳 『イタリア人民の歴史Ⅱ』 未来社
- Schnapp, Jeffery T ed., 2000, *A Primer of Italian Fascism*, University of Nebraska Press.
- 柴田敏夫 1982 「ファシズム体制における党と国家——国防義勇軍と軍の関係」 浅沼和典・河原宏・柴田敏夫編 『比較ファシズム研究』 弘文堂
- 高橋進 1997 『イタリア・ファシズム体制の思想と構造』 法律文化社
- 竹内啓一 1998 『地域問題の形成と展開——南イタリア研究』 大明堂
- 竹村英輔 1979 「イタリアの労働憲章」 東京大学社会科学研究所編 『ファシズム期の国家と社会 第5巻 ヨーロッパの法体制』 東京大学出版会
- Tannenbaum, Edward, 1972, *The Fascist Experience*, Basic Books.
- Vene, Gian Franco, 1988, *Mille lire al mese*, Mondadori. = 1996 柴野均訳 『ファシズム体制下のイタリア人の暮らし』 白水社
- 吉野耕作 1997 『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』 名古屋大学出版会
- Zangrandi, Ruggero, 1962, *Il lungo viaggio attraverso fascismo*. = 1973 上村忠男訳 『長い旅』 サイマル出版会

(しんせんじ ゆき)